

『「資本論」に関する手紙』（法政大学出版局・岡崎次郎訳）から抜粋②

No.219 (P407) エンゲルスからダニエルソンへの手紙 (1892.9.22)

「世界主要国の帝国主義前夜の経済状態及び後発ロシアの状態・資本主義的生産はそれ自身の滅亡を惹起する。」

「これまでのところ、我々は次の一点では一致しています。即ち、ロシアは1892年には、純粹農業国としては存在しえないだろう、ロシアの農業生産は工業生産によって補完されねばならない、ということ。ところで私は、工業生産は今日では大工業を意味するものと考えます。即ち、蒸気、電気、自動ミュール紡績機、力織機、最後に機械を生産する機械。これらの近代的生産手段の採用は、ロシアが鉄道を採用した日から予定の結果だったのです。…戦争が大工業の一部門となった瞬間から（装甲艦、速射連発砲、無煙火薬等々）これら一切のものがそれなしには作られ得ない大工業は、1の政治的必然性になりました。全てこれらのものは、高度に発達した金属工業がなければ得られないものです。そして金属工業は全ての他の工業部門における、特に繊維工業における対応的発達がなければ不可能です。…クリミア戦争（1853-56）を特徴づけたものは近代的生産諸国に対する幼稚な生産形態をもつ1国の絶望的な闘争でした。ロシアの人々はこれを完全に理解したが故に、近代的諸形態への移行が生じたのです。1861年の農奴解放によって再び元に戻ることもない移行が。

1854年に支配的だった未発達な生産方法から今や支配的になり始めた近代的方法への移行は必然的です。…この見地からすれば保護の問題は単に程度問題にすぎず、原則の問題ではありません。原則は不可避だったのです。もう一つ確かなことがあります。即ち、もしロシアがクリミア戦争後にそれ自身の大工業を必要としたとすれば、ただ1つの形態—資本主義的形態でのみこれを持つことができたということです。そして、この形態とともに、ロシアは、他のどの国でも資本主義的大工業に随伴する全ての結果を背負い込まねばならなかったのです。

あなたは、機械製品が家内工業生産物にとって代わり、農民の生活について不可欠な補充的生産を破壊することを嘆いておられます。しかし、それは資本主義的大工業の絶対に必然的な1結果、即ち、国内市場の創出です。(K1・24章第5節) …現実の問題はこうなると思われます。つまり、ロシア人は彼等自身の大工業が彼等の家内工業を破壊するか、それともイギリスの輸入商品がこれを遂行するか、を決定しなければならなかったということです。保護政策をもってすればロシア人がこれをなし、それなくしてはイギリス人がこれをなしたということです。

資本主義的生産は、一時的な一経済段階として、内的矛盾に満ちており、これらの矛盾は、資本主義的生産が発展するに従って発展し且つ明瞭になります。それ自身の市場を創出すると同時に破壊するというこの傾向も、この矛盾の1つです。更に1つの矛盾は資本主義的生産が到達する『出口のない状態』で、それは、ロシアのような国外市場を持たない国では、自由な世界市場で多少とも競走能力のある諸国におけるよりも早く現れます。競走能力のある諸国の場合には、この一見出口のない状態は、商業的転換に、新市場の暴力的開拓に、その出口を見出します。しかし、この場合にも袋道は迫っています。イギリスを見たまえ。その開拓によって英国商業に繁栄の一時的回復をもたらした最後の新市場はシナです。だから英国資本はシナの鉄道建設を力説します。しかしそれは、シナの小農業と家内工業との全基礎の破壊を意味します。…数億人の人民が生活不能の状態におかれるでしょう。その結果は、前代未聞の大量移民でしょう。世界各地にシナ人が氾濫して、世界最低のシナ的生活水準を基礎として、欧米の労働者と競争する。そして、もし生産の体制が欧州でその時までに変革されていないならば、それはそのとき変革されねばならないでしょう。…資本主義的生産はそれ自身の滅亡を惹起する。それはロシアでもそうするだろう、と言ってよいでしょう。」(p412)